

三、第二時に於ては全生命を深く理解させる所に主眼を置いて取扱つて行く。また誦讀にも習熟させる。

四、第三時に於ては漢字や語句の書取、主要語句の意義、語句・語法の適用等に習熟させるを主として學習させる。

五、本文には引用した章句や和歌などがいくつもあるから、これ等の包む精神については、理解させる所ありたい。

六、本文中には文法上の説明を要する所も多少あるから、特に抜き出して理解させる所ありたい。

七、本文は文語文であるから、之を口語文に直す力の培に對しても怠らぬやう注意する。

八、次の語句の意味は殊に明確に知らしめる所ありたい。

萬象 眉をひそめ 目を逆立つ 驚かざらん 恥づかしきかな 類へ言へり 萬

言 人も心を磨けとぞおもふ

九、次の言葉は特に其の適用に習熟させる所ありたい。

ひそめる 逆立つ いかでか 省みよ 萬言 申すも長し

第二十一課 温泉を問合す

要 旨

本課は湯治の必要から、かつてかすかに聞いてゐた温泉場の所在と旅館とについて問合はす手紙である。で本課に於てはかうした書簡文を讀む力を培ふと共に、此の種の條件をもつた手紙の認め方等について知らしめるを以て其の要旨とする。

教材の研究

文 章

一、差出人大石とも子と河口よし子とは友人の間柄で、折々文通もしてゐるし、また家庭の事情も相當知つてゐる間柄であらう。

二、大石とも子の母は、春から急性ロイマチスで困つてゐる。醫師の話では薬療だけでははかどらないから湯治に行つた方がよからうといつたので、母思ひのとも子は夏休みになるのを待つ

て、さうしようと考へてゐるのである。

三、ところで河口よし子の祖母もかつてロイマチスで湯治に行かれたことがある所から、その温泉場の所在と然るべき旅館とについて問合はせたのである。

四、かうした問合せの手紙文に於ては、次の條件を具備することが是非必要である。

1、温泉場を問合す譯をかくこと。

2、温泉の名及び場所をきくこと。

3、然るべき旅館の名をきくこと。

五、本書簡に於て、その冒頭に時候の挨拶や安否の伺等についてかいてある所から考へると、

二者の間には可なり音信のへだつてゐたものと思はれる。

六、文の形式上から言へば、大體前文と本文との二部から成つてゐる。即ち

「追ひ／＼暑さ……何かと御忙しき御事と察し上げ候」——前文、

「さて昨年御目にかゝり候節……然るべき旅館の名を御知らせ下されたく願上候。」——本文

「かしこ」——結尾。

である。全體からいつて叙述には無駄がなく頗る要領を得た一篇である。

七、實用的の書簡文だが、母を思ふ孝子の思念が全文の上に流れて居る。情實兼備へた一篇だと見てもよい。

語句

夏なつ——七月のはじめ頃卵からかへるなつ。

何なにかと——何やかやと。

ロイマチス——病氣の名。リウマチスともいつてゐる。冷濕又は風邪におかされ、若くは滋養の不足から起る一種の病氣。専ら關節を侵すものと筋肉を侵すものとある。前者は關節の疼痛又は強直を感じ、後者は疼痛處々に轉移する。

温泉——地下水が地下熱の爲に熱せられて地上にわき出るもの。種々な含有物があつて、それが人體の病氣にきゝめがある。

急性ロイマチス——急に發病したロイマチス。

湯治——温泉にひたつて病氣をなほすこと。

然るべき旅館——よささうな宿屋。

女子用 第二十一課 温泉を問合す

資料

温泉

石津藥學博士の分類によると。

單純泉・アルカリ泉・鹽泉・苦味泉・炭酸鐵泉・炭酸泉・硫黃泉・明礬泉の八類に分け更に之を三十
二に細別してある。

ロイマチスに効能ありといはれてゐるのは、單純泉、アルカリ性硫黃泉である。アルカリ硫黃
泉は赤倉(新潟)・鳴子(宮城)・中房(長野)で、單純泉は箱根湯本・塔の澤・姥子(神奈川)・別府(大
分)・伊東(静岡)・武雄(佐賀)・上諏訪・下諏訪(長野)・飯坂(福島)・那須(栃木)・長岡(静岡)・淺間(長
野)・温陽(朝鮮)・安代(長野)・五色(山形)・青根(宮城)・朽尾又(新潟)・畑毛(静岡)・古奈(静岡)・俵
山(山口)・北投(臺灣)・有福(島根)・三朝(鳥取)・甲子(福島)・院内湯澤(秋田)・上高地(長野)・大湯
(新潟)・カル、ス(北海道)・湯村(島根)・朱乙(朝鮮)など中々に多い。(温泉案内に據る)。

取扱法の研究

區分

第一時 全文の學習。

第二時 全文の練習及び應用。

取扱上の注意

- 一、第一時に於ては、大體次の順序によつて取扱つて行く。
 - 1、全文を自由に一讀させて其の全内容を意識させる。
 - 2、語句・語句等についての質問を處理する。
 - 3、一・二回よく内容を意識しながら自由に讀ませる。
 - 4、内容について問答する。
 - 5、讀方の練習を行ふ。
- 自由に——また指名して。
- 二、第二時に於ては、大體次の順序によつて學習させて行く。

女子用 第二十二課 温泉を同合す

- 1、全文を自由に一・二回讀ませる。
- 2、質疑に應答する。
- 3、内容について回答して一層深く理解させる。
- 4、記述の形式上から、叙態・叙式・用件・用語等について問答する。
- 5、練習・應用。

(イ) 讀方の練習。

自由に——また指名して。

(ロ) 文字・語句の書取。

(ハ) 語句・語法の適用。

何かと 起ち居も 薄らぎ 然るべき 承り

三、本文は言ふまでもなく候文である。で之を口語に直す力の培ひも必要だ。で全文を口語體に改作させることも無用ではなからう。

四、次の語句は特に口語に直させる所ありたい。
皆々様御障りもあらせられず候や 察し上げ候 御出掛けのやう承り候ひしが 幾分薄

らぎ候へども 湯治が宜しからんと申され候

五、本文の學習に於て、かうした手紙の具備すべき要件及び其の認方等について知らしめるは勿論だが、尙これから得た暗示に基いて、可然問合の手紙を各自々々にかみしめることもよき練習だと思ふ。

第二十四課 月 見 草

要 旨

本文は月見草の花に對しての作者の感じを表現したので「靜寂」といふことが一篇の生命になつてゐる。随つて本文に於て之を深刻に味得させる所に其の主眼を置く。

教材の研究

文 章

一、原文は阿部次郎先生著の「北郊雜記」中にある。本讀本中でも傑出した一篇である。

女子用 第二十四課 月 見 草

二、第一節は月見草に對する作者の感想である。即ち月見草は私の好きな花の一つで、それは

○花が清新であるのと。

○花びらが柔かであること。

○夕暮や曉にすが／＼しくあるのと。

が、此の花のほのかな黄色を懐かしく思はせるから云々と言つたのだ。之をとほして作者の愛する静寂は光明な静寂、清新な静寂だといふことが讀まれる。

三、第二節は月見草に對する作者の思出を叙したのである。即ち

○夏の朝、輕井澤の近郊を散歩して月見草を見たが、何ともいへない親しい氣持した。

といふことについて叙述したのだ。開く所によると「静寂」の一篇は、作者を失つた愛兒が基因してゐることだから、月見草に對したとき、そこに特殊の感があつたに違ひない。

四、第三節は一篇の中心思想で、月見草の花が開いて行く有様を描いたのである。即ち

○ある夕暮、食後二階の欄干に凭れて何けなく下を眺めると、月見草の蕾が急にふくらんで行くやうに思はれた。

○そこで急いで庭に出て、月見草の傍にしゃがんで見詰めてみると、先づ蕾が開く、次に花瓣

がふくらんで来る。不意に一片がはじけると、他は一度にふうわりと開いて来る。遂に蕊を見せて咲いてしまふ。其の咲初める時にほのかな香氣がブンと鼻をうつ時の氣持は何ともいへない云々。

と、月見草の咲く時の格別な趣について叙述したのだ。ちつと花を見詰めながら思ひに浸つてゐる作者の姿が幻のやうに眼前に浮んで見える。作者の静寂觀が濃厚に滲み出てる。

五、第五節は作者の感で、また一篇の結收である。こゝに記してある。

「私のやうな者には、月見草の咲くのを見ても、固より悟は開けない云々。」
は前節に、

「昔の人が蓮の花の開く音を聞いて悟をひらいたといふ云々。」

とあるに對して言つたので、さういふ所に却つて作者の深みのある生活がひそんでゐる。それから本文には、

「しかし新しく咲く花を見守る静かな心は誠に尊いものである。」

とあるが、原文には「新しく咲く花を見まもる静かな愛のこゝろは、本當にありがたいものであつた。」

とある。氏の「静寂」の一篇中には、

「凡ての人は死ななければならぬ——吾々は往々にして、この牢乎として抜くべからざる事實を忘れようとする。併し心を鎮めてしみぐ」とこの事實を想ひ起すとき、吾々はどれほどの涼しさと寂しさと人なつかしさとを感じるのだらう。貴族も、平民も、學者も、無學者も、資本家も、勞働者も、凡ての人はいつかは焼かれて灰になるか、埋められて腐るかしなければならぬ肉身を持つてゐるのである。吾々の心が憎みに燃え争ひに熱するとき、吾々は振返つてこの事實を考へて見なければならぬ。同じやうに死すべき運命を持つてゐるといふ自覺は、争ひの唯中に於ても、吾々に愛と和ぎとのこゝろを教へるであらう。」

とあるから、「静かな心」といふよりも「静かな愛の心」といふ方が、氏の内面がよく讀まれる。氏の「愛の心、和ぎの心」の内面には餘程意義深いものがあるやうに思ふ。で實際に取扱ふ際には、原文をも参照して作者の内面を深く想察して取扱ふ所もありたい。

語句

月見草——草花の一種。高さ三尺位、葉にも莖にも細い毛がある。葉は長楕圓形で、花は黄色で大

きい。此の花は日暮頃から開いて、翌日の日中になるとしほむ。月見草の名もこんな所から出たのだらう。

すがすがしさ——さつぱりとして心地よいこと。

ほのかに——かすかに。ほんのりと。

輕井澤——信越本線、輕井澤驛の所在地で、長野縣北佐久郡東倉村字輕井澤のこと。

目のあたり——目のまへ。

はかない——つまらない。

見守る——ちつといつまでも見てゐる。

資料

本文は阿部次郎著「北郊雜記」の七「静寂」といふ中の一章で、其の原文は次の如くである。

静寂

—

凡ての人は死ななければならぬ——吾々は往々にしてこの牢乎として抜くべからざる事實を忘

れようとする。併し心を鎮めてしみじみとこの事實を想ひ想すとき、吾々はどれほどの涼しさと寂しさと人なつかしさとを感じるにたらう。貴族も平民も、學者も無學者も、資本家も労働者も、凡ての人はいつかは焼かれて灰になるか、埋められて腐るかしなければならぬ肉身を持つてゐるのである。吾々の心が憎みに燃え争ひに熱するとき、吾々は振返つてこの事實を考へて見なければならぬ。同じやうに死すべき運命を持つてゐるといふ自覚は、争ひの唯中に於ても、吾々に愛と和ぎとのこゝろを教へるであらう。

一 昨年の秋たゞ一人の男の子を失つてから、私は漸くこの事實の意味を悟ることが出来たやうに思ふ。併し日を経るに従つてこの意識も次第に日常生活の騒がしさに溺らされて行く。あの當時のつきつめた寂しさと人なつかしさを忘れがちな近頃の私は、決していい状態にゐるとは云ひ難い。併し心持の騒がしさに堪へがたくなる毎に、私は振返つてあの當時のことを想起する。さうして凡ての人は死ななければならぬといふ眞理の反芻を試みる。かう云ふ心持になるのも亦、死んだ兒があゝの世から俗念の多い父を警醒するのだと、思へば思へないこともないのである。

二

静寂は何の物音もしないといふことではない。それは音響の缺乏といふやうな消極的なもので

はなくて、積極的に人に迫る力を持つ或物である。それだからこそ、泌みつくやうな静かな周圍の中に、木の葉一ひらの散る音さへ、一層その静寂を深くし、眞夜中になく犬の遠吠が寂しい片田舎の丑滿時を更に寂しくするのである。ニイチエのツアラッストラに「犬も幽霊を信ずる眞夜中」といふ句があるが、東北の僻陬に育つた私のやうな者は、この句が文字通りに自分の體驗にあてはまることを感ぜずにはゐられない。幼い頃の自分にとつては、静寂はなつかしいよりも寧ろこはかつた。それほどまでに自分は静寂にとり巻かれてゐた。併し成人して都會の中にまじるに従つて、あの恐ろしかつた静寂がいつの間にか自分のあこがれの國となるまでに遠ざかつてしまつた。眞夜中に不圖眼をさまして見ても、子供の時分に感じたやうなしみじみした静寂を感じることはもう出来ないことを覚える。併しそれは「境」が悪いのか、自分の「心」が静寂と縁がなくなるほどに騒がしくなつてしまつたのか、この間にはまだ疑問の餘地があるやうに思ふ。嘗て叡山にのほつて根本中堂の傍にある宿坊にとまつた夜、自分は明かに静寂にとり巻かれてゐることを感じた。さうして翌る朝曉に起きて雨戸を繰り、青葉を埋めて深くこめた霧を通して時鳥の啼聲をききながら、私はまだ静寂に對する感覺を失はぬ自分を祝福した。その後十餘年の月日は流れたが、私はこの間に心ゆくほどの静寂の體驗を想起し得ぬことを遺憾に思ふ。それは依然とし

て境が悪いのであるか、それとも今度はもう静寂と縁がきれてしまふほどに心が騒がしくなつたのであるか、この夏山中に入つたら一つそれを試して見たい。

三

月見草は私の好きな花の一つである。とり放して云へば、黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してゐるものではないが、あの花瓣の柔かさと、あの清新な鮮かさと、又その花を見る夕暮や曉のすがくしさととは、月見草のほのかな黄色を云ひ難くなつかしいものに思はせるのである。自分は一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草は野原を忘れることが出来ない。朝まだ暗いうちに狭苦しく満員になつてゐる停車場前の旅亭を出て、同宿のI君M君と新舊兩市街の間の野原を歩いた月見草が曉に近くいくらか萎れかゝつて限りなく咲き續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分達は言葉少なに並んで歩きながら、何とも云へず親しい氣持になつて又旅舎に歸つた。今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを眼のあたり見た。二階の欄干に凭つて食後の煙草をふかしてゐると、庭の月見草の蕾が急にふくらんで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開く音をきいて悟をひらいたといふ話をかすかに想ひ起しながら、急いで庭に出て月見草の傍にしゃがんで見てゐると、如何にも今咲きかけて

る蕾の幾つかある。最初に花瓣をつんでゐる萼が後退を始める。萼が開くと巻かれてゐた花瓣が次第にふくらんで來て、不意に一ひらが急にはじける。さうすると四つの花びらが一緒にふうわりと開いて來て、遂に蕊を見せて咲いてしまふのである。その咲きはじめに、ほのかな香氣が鮮かに鼻をうつときの氣持はなんとも云はれない。明日の朝になればしほんでしまふ果敢ない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても固より悟りは開けない。併し悟りが開けなくとも新しく咲く花を見まもる靜かな愛のこゝろは、本當にありがたいものであつた。

取扱法の研究

區分

第一節 第一・二節の學習。

第二節 第三・四節の學習。

第三節 全文の總括的練習及び應用。

準 備

月見草の實物又は繪畫。

取扱上の注意

- 一、本文に於ては月見草に對する作者の所感をとほして、そこに流動して靜寂味を成るべく深く味得させる所に中心を置いて取扱つて行く。
- 二、第一時に於ては、先づ全文を一讀過させて其の全内容にふれさせ、それから參節について大體次の順序によつて學習させる。
 - 1、各自をして自由に一・二回讀ませる。
 - 2、質問を處理する。
 - 3、内容について問答する。
 - 4、讀方の練習。
- 三、第三時に於ては大體次の順序によつて學習させる。

- 1、全文を自由に一・二回讀ませる。
- 2、質疑に應答する。
- 3、内容について問答して一層深刻に味得させる。
- 4、表現上について問答する。
叙態——構想——統一——叙式——用語等。
- 5、練習・應用。
 - (イ) 讀みの練習。
 - (ロ) 漢字・語句の書取。
 - (ハ) 語句・語法の適用。
- 四、本文を取扱ふ前、輔導者に於ては是非資料部にある「靜寂」の全文を一讀する所ありたい。
- 五、文は自己を讀むといふが、本文に於ては殊に深化の自己を讀むといふことが至切である。で之を取扱ふ前に輔導者は幾度もくりかへして讀んで、できるだけ對象の生命に深刻にふれ、さうして兒童に樂む所ありたい。
- 六、次の語句は殊に其の適用に習熟させる所ありたい。

すがくし ほのかな 懐かしい しをれかゝつて しんみりとした しゃがんで
 ふくらんで はじける ふうわりと 見守る 静かな心

七、本篇の作者阿部次郎氏は明治十六年八月山形縣飽海郡上郷村に生れた人である。現在は文學博士で東北大學教授の職にある。哲學者として、また美學者として新人の間に重きを置かれてゐる。彼はあくまで敬虔にして謙遜な態度を以て古聖賢の道を求めつゝある若き修道者である。其の沈潜的内省的な所は早稻田大學の片山伸氏と相通してゐる。が伸氏よりも更に宗教的に突きつめた所があると言つてゐる。著書には「倫理學の根本問題」・「美學」・「三太郎の日記」・「阿部次郎論文集」・「ツアラトウストラ解釋並に批評」・「北郊雜記」等多くある。

高等小學讀本指導書 卷三 終

昭和二年六月一日初版印刷
 昭和二年六月五日初版發行

〔卷三〕

高等小學讀本指導書(奥附)

定價金參圓



著作者 野澤正浩
 發行者 藤原惣太郎
 印刷者 山崎治兵衛

發行所

東京市京橋區入舟町五番

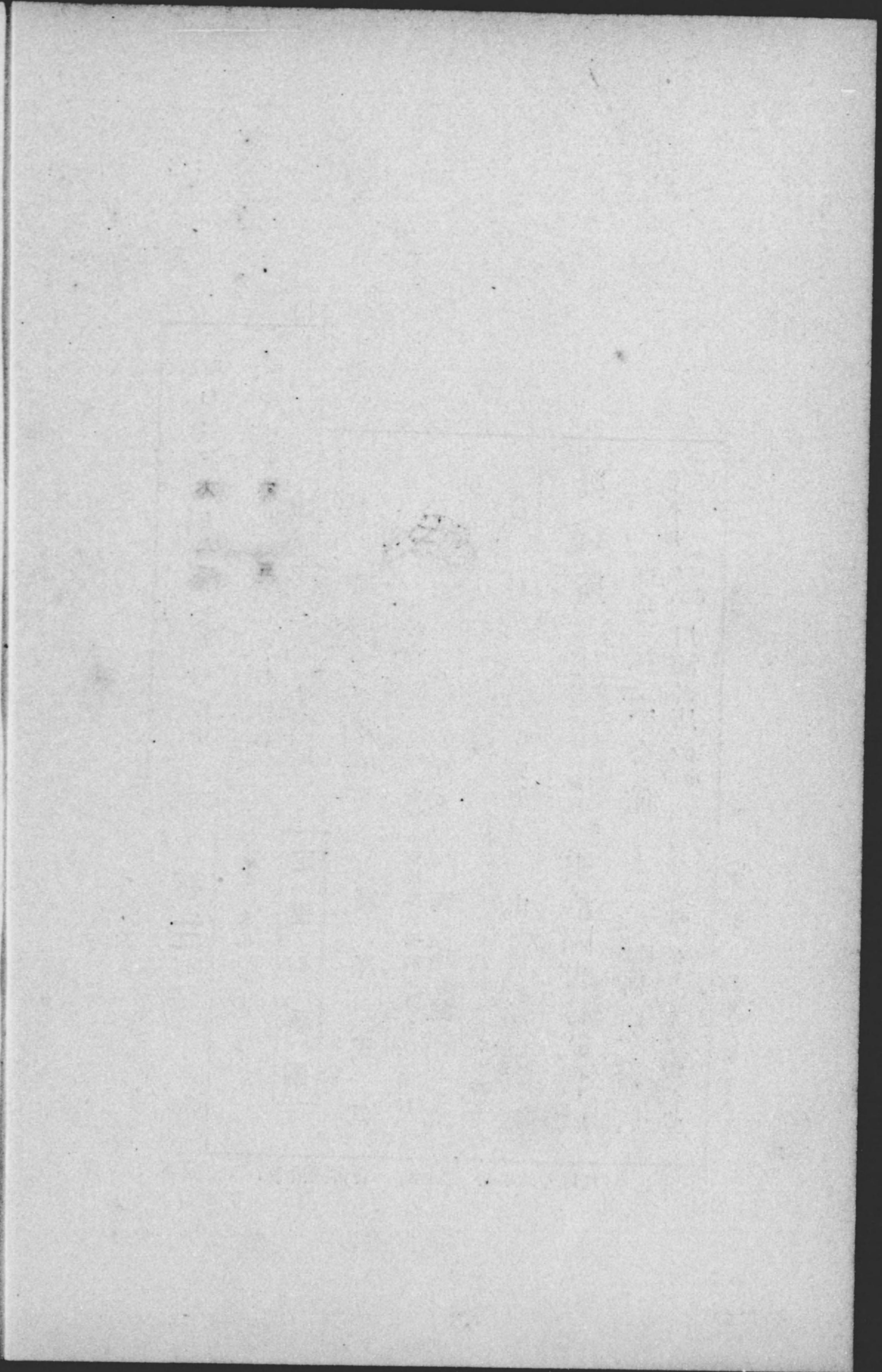
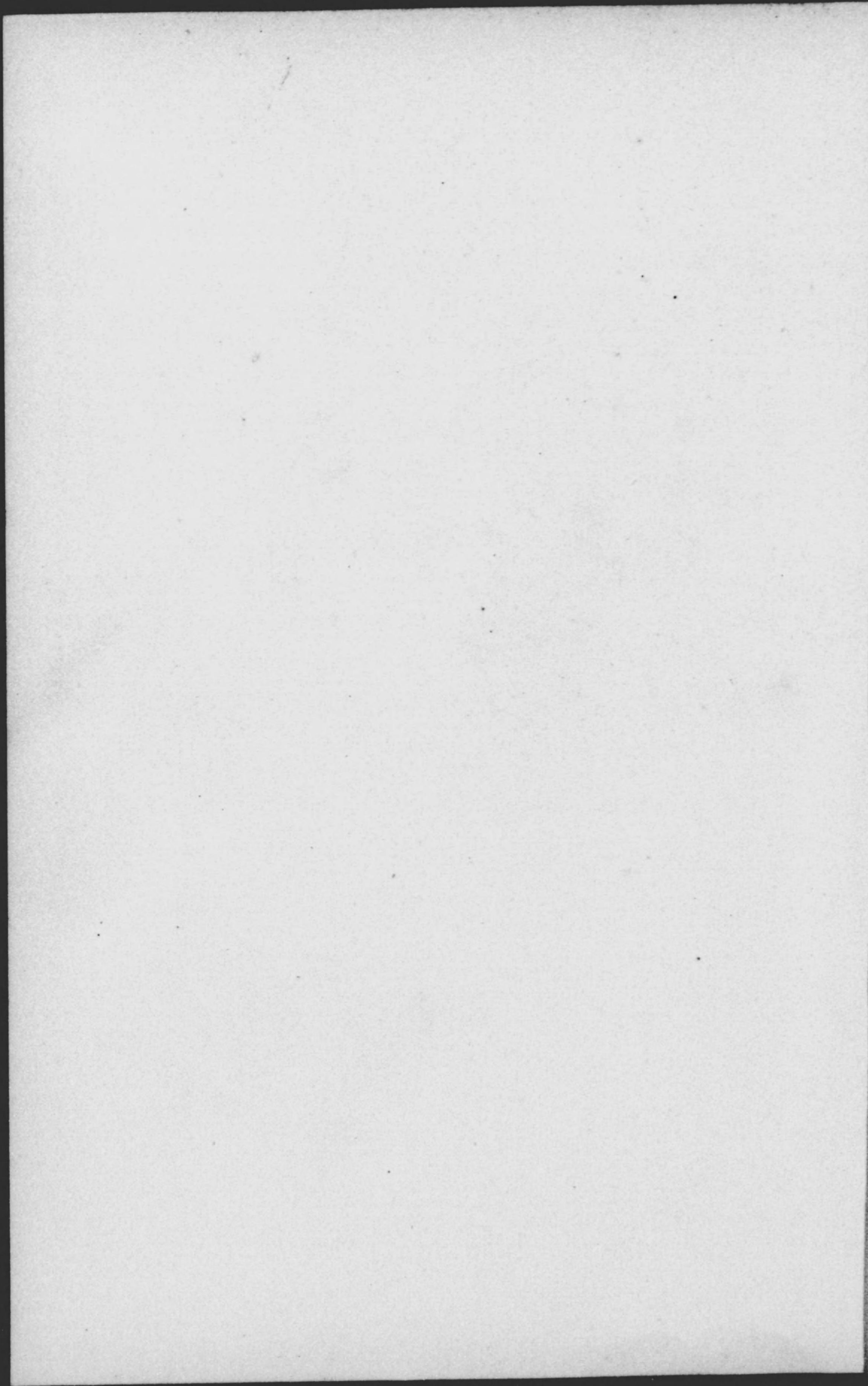
明治圖書株式會社

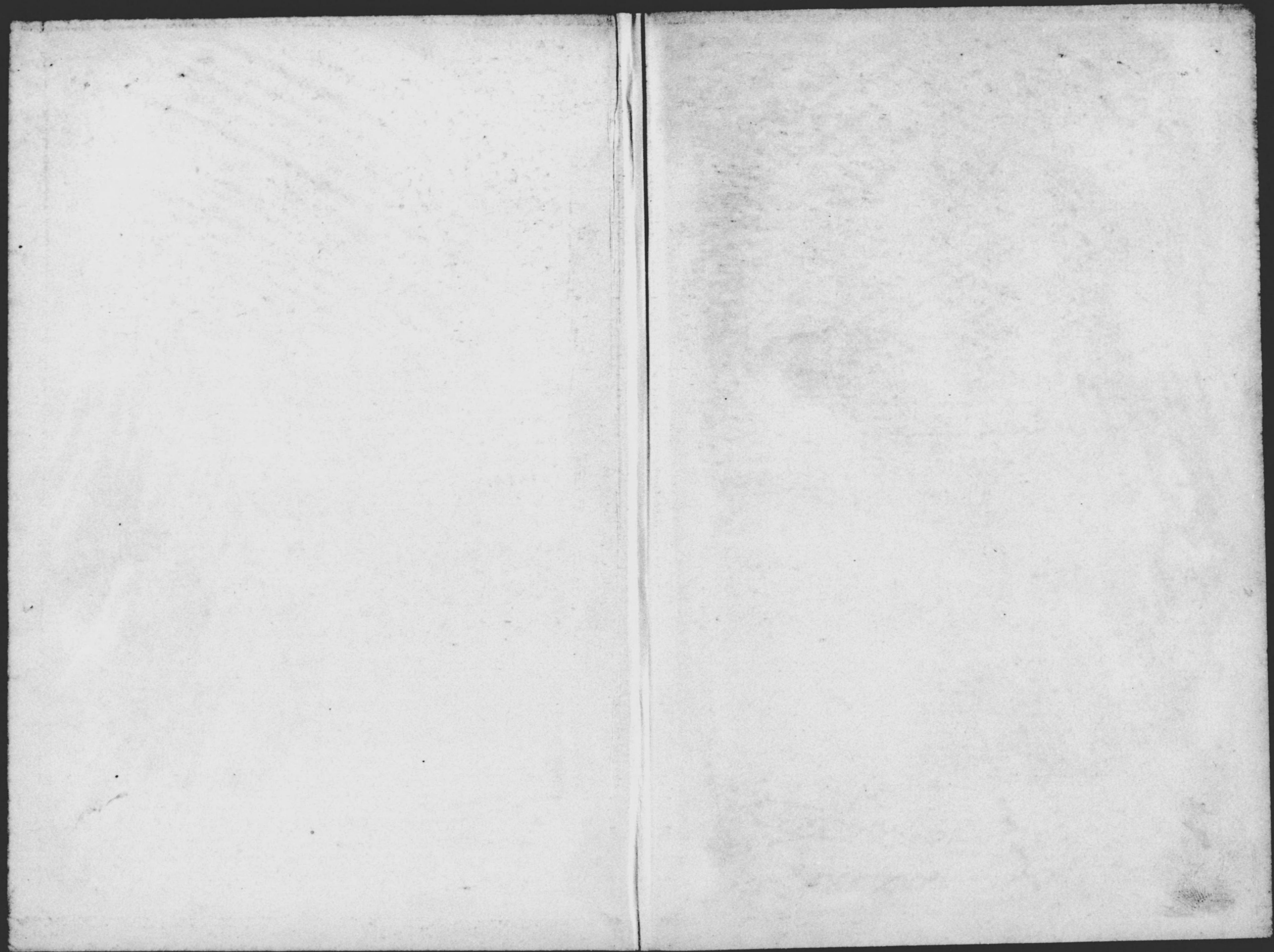
賣捌所

東京 林六合館 大阪 會社柳原書店
 名古屋 川瀨書店 米久留 菊竹金文堂 佐賀 大坪惇信堂

(製本部……關根・中條・製本)

〔所刷印社星七 部刷印社會書圖治明〕





明治圖書會社出版